

という言葉に置き換えて考えると、非常にわかりいいのではないかと思います。

川井：よくわかりました。先生と同じようなことを司馬遼太郎さんが、設計というものは文化であり、芸術であるという言い方をしている

作家の言葉・精神が 伝わってくるものが芸術

中村：その通り。芸術文化になりまずと芸術の原点があるわけですが、今おっしゃった中で、その作家の言葉がもろに出てくるのが芸術です。その作家の言葉、つまり精神といましようか、言葉がもろに伝わってくるのが芸術であって、伝わってこないのはあるいは芸術ではないのかもしれない。

私はこの間、日展の中で話をしたんですが、ただつくればいいのではなくて、あなたたち自身の言葉が作品の中からもみ取れるようでないといけないんだ、というようなことを話したんです。自分のために作品はつくるんだと。

何かの本で読んだんですが、源氏物語の話で、紫式部は割合晩婚で、しかも旦那様が早く亡くなって、その直後から源氏物語を書き出しています。多分その主人公を自分の過去とダブらせて、思い出日記のようにずっと書きつづっていた。昔のことですから出版界や印刷業界はありませんから、お

る。作品を見て、ああよかったとか、楽しかった、感動、そういうたものを与えるものが芸術なんだという言い方をしているんです。要するに楽しむことなんですよ。ね。楽しませてくれるものが文化なんだと。

そらく友達が来て、見せてくれと言つので見せてやったら、これは面白いわねと言ってくれて広まっていた。でも結局どんなに頑張ってみても最初の読者は自分自身なんです。だから自分自身が読んでみて楽しかった、面白くなければ何にもならないわけです。つまり、そこところに自分自身の言

葉が出てくるかどうかです。今、いろいろな芸術家の人たちは人のためにやるんですけれども、人のためではなくて自分自身が納得し、自分のために一番最初あるべきではないでしょうか。市長さんという立場は確かに市民のためなんです。自分自身が楽しめるものでなければおやりになる気にならないでしょう。

川井：それはそうです。中村：それであの能楽堂を造って、能楽堂は大体は外のものだから、外の空気がちゃんと入ってきて、いかにも外にあるような雰囲気はどこかに出してあります。普通はあいうことをしませんよ。あれは市長さんご自身、これが本当のテーマで、これが一番楽しいという

ことを一番よくご存じだからこそできたと思います。

結局、どういふものができるといつ最後の詰めは、市長さんの持つていらつしやるキャラクターというよりは、実際は文化度ですよ

例えばお城だつて鉄筋でいいんですよ、そんなことを言おうとしたらね。それをこたわつてこたわつて木造で、またこたわつてこたわつて復元をなさつた。これは市長さんでなければできなかったと思います。キューブでもそうですよ。最も新しいものを入れて、それでいてあれだけの広さが要るんだ。日本中を全部知っているわけではありませんが、おそらく日本の中の指折りの一つだろうと思

います。だから、それは市長さんのすべてにこだわりますよ。

川井：大変ありがたいことには、そういう白石の本物に対してのこだわり、これはもう私だけでなく市民が多く持っているものだろうとは思っています。

先生が白石を大変好きになつていただいたり、音楽ですと三枝成彰さんが月に一度は解説をしながら音楽会をやつていただいている。それが日本で現在最も評価されているもので、半年や一年遅れてから仙台で同じ公演が行われる。能楽堂で喜多流宗家の喜多六平太先生や職分の佐々木宗生さん、お茶ですと江戸千家の若宗匠がおいでになつて指導してくださる。このように、一流の方に白石を



ユニークな解説で定評のある三枝成彰さん(ホワイトキューブ)



喜多流・佐々木宗生さんの講話による、子供たちを対象とした「仕舞と狂言の特別公演」(碧水園)



江戸千家・若宗匠を席主として開催された市民茶会(白石城)

評価していただけるというのは、やはり本物に対してのこだわりと申しましようか、あるいは先生の言葉をお借りすれば文化度とい

子供のときから

文化に親しむことが大切

中村：ただ、文化というのは今日やって今日出来上がらないんです。それがひたひたと押し寄せてくるのは五年先か十年先か、今の若い子供たちがそれになじんで、これが当たり前だと思ふときに初めて完成するわけです。ということになりますと、やはり三十年周期とか、種をまいてから三十年かかるとか。結局、文化というものは長い年月をかけなければ、体の中から染み出てくるという感じにはなりません。

おそらく、今の白石の方が能楽堂なら能楽堂に子供のときから慣れていらしたとします。そして女

ましようか、そういうものに共感していただけるのかなと思っております。

の方がどこか遠いところに嫁がれて、ここには能楽堂がないわねという話から、白石というのはあんなのがあつたんだ、そういうふうになつてくるのではないのでしょうか。文化というのは簡単には廃りませんけれど簡単には育たない、そう思います。

川井：こんなことを言つておかしいですけれども、私が死んで五十年なり百年なり経つた後で、白石が文化度の高い心の豊かなまぢになつてくれれば、もつてめいすべしだと正直思っています。

中村：そうですね。川井：というのは、建物を造つて

それで終わりではないんです。それがスタートなんです。文化を育てる土壌というのは、一つは建物を造つたところから始まってくる。

例えばキューブには維持管理費とは別に、ソフトに年間約一億円を投じております。あそこが興行的にもつかかるはずがないんです。ベルリンフィルやN響を呼んできて、あの席が仮に二万円で売れても赤字ですから。アリーナの方ですとJBLとか、いろいろございませす。それは赤字というよりも文化体育振興のための費用なんです。

今、大変景気が悪いので自治体の財政も非常に苦しくなつております。すると自治体で一番最初に切り詰められるのは文化予算です、福祉は切れませんから。しかし、財政的に最も見返りのないのも福祉と文化なんです。例えば一億円を出したところで二、三千万円ぐらしか戻つてこない。しかし、行政効果のことを考えて、頑張るか頑張らないかの差だと思ふんです。

中村：ああ、なるほどね。

川井：そういう中で白石は、先生があつちやつた、とにかく三十年先、五十年先を見ようということ、キューブで子供たちの合唱団を新たに造つてスタートしました。それから、能でも高砂を謡つ



ブロンズ像「春を謡う」の4体のうちのひとつ(中村氏作・ホワイトキューブ)



子供たちに親しまれているブロンズ像「子守唄」(中村氏作・ホワイトキューブ)

会というふうな、やはり子供のときから肌に染み込んだものは本物になつていくんだらう、そういうことが大事なかなと思います。同じ楽しむにしても、だんだんより高度な楽しみ方というものを覚えてくるんです。

中村：子供が大きくなるときのことまでというお話がありました。が、結局楽しむ方法をまず覚えてくれるということだと思ふんです。例えば芸術にしても、初めはなかなかとつきにくいだろうと思ひますが、だんだん慣れてくるととつきまします、子供の

市民の郷土愛から生まれた 大砲銅像

川井：話は変わりますが、大変ご無理をお願いしまして大砲の銅像をつくつていただきましたけれども、制作にかかわつての先生のご感想、あるいはどんなところにこ

ときからいかに空気のように、そこから始まるんでしようね。

川井：キューブにある先生のブロンズ像の中で一番びかびか光っているのがあの小さい像、子守唄、みんな子供たちが頭をなでていくんです。ああなつてくると、もう本当に自分の心の中に溶け込んできたという感じになつてくる。

中村：おそらく一度なでてください方はずつとそこにあることをご存知ですし、それが習慣になりまして、そういうのでいいんじゃないでしょうか。

苦心なさつたかというのをお話しいただきたいのですが。

中村：私を感じましたのは、白石の方々のいわゆる郷土愛みたいなものがすごいなということですよ。